

## View 6: ジオパークとナビゲーション

今、地質学の世界で「ジオパーク」が熱い。ジオパークは直訳すると「地質公園」。地質学的に価値のある場所（ジオサイト）を保全すると同時に、観光や教育、地域振興などに活用しようというユネスコの認定事業である。

同じユネスコの世界遺産ほどの知名度はないが、世界遺産では保存が第一であるため、特に自然遺産については利用について相当の制約がある。

一方ジオパークは活用にも軸足が置かれているため、観光に活用し、地域振興につなげたいという自治体からの熱い視線を浴びている。これまでも火山の作り出す景観は、箱根や日光などを代表として観光の核となってきたし、最近ではエコツーリズムのように、自然そのものを味わうツーリズムが少しずつ浸透している。

その一方で、植物や動物に対する興味は高いものの、日本ではヨーロッパやアメリカと比べても地質学的な特徴に対する関心は低かった。珍しい地形に対して「地形萌え」なんていう言葉を僕らが創作できるくらいだから、その関心の低さは容易に想像できよう。ジオパークに対する地質学者の思いには、生物学に対してこの面で遅れをとってきた積年の恨みを晴らすのがとき勢いを感じる。

国内には世界ジオパークに認定されている場所が4カ所、日本ジオパークに認定されている場所が14カ所ある。雲仙や昭和新山で有名な有珠山は世界ジオパーク、南アルプスの中央構造線は日本ジオパークに認定されている。同僚との共同研究のしがらみで、来年度に日本ジオパークを目指す伊豆半島のジオパーク構想に関わることになった。

動物は見ているだけでも楽しいし、植物も一見して美しさが分かるスケールだが、ジオサイトは一見しただけでは価値が分からないものが多い。目的が教育やツーリズムを通しての地域振興なので、それを分かりやすく伝えるためのガイドや案内が欠かせない。そこで当然のように、地図は重要な役割を果たす。ジオサイトに対する愛と理性にあふれた同僚の誘いで、ジオツアーにおける地図利用についての研究を



見事な柱状節理の前で、高校生の指導の下、スケッチをする小学生たち。そういえば、大陸の偉大なチャンピオン、チェリー・ジョルジョの母国フランスは火山への愛の国でもある。

手伝ったり、ガイド養成のための講座で、地図読みの講習を7月上旬に担当したりした。

読図の講習は何度もしているが、いずれもナビゲーションを主題とするもの。それに対してジオガイドのための読図では、現地到達するためのナビゲーションは必要だが、それ以上の地形の特徴を読み取ったり、地図を使って全体像を把握したりすること、また地図を使った下見の効率化や安全

の確保など、多面的に地図が利用される。それなりの準備をしたが、結論から言えば、自分にとって目新しいスキルや知識は必要なかった。

たとえば伊豆東部に多い単成火山には、細かい砂れき状になった溶岩が作るスコリア丘と、粘りけのある溶岩が盛り上がってできる溶岩ドームがあるが、その区別は等高線の緩急を見ると一目瞭然である。火山地形を観察しやすい場所の把握も、等高線から地形が



イメージできれば一発だ。安全管理も、ナビゲーションのプランニングでの話がそのまま使える。地図が読めるということは、自然の中での活動にとって相当なアドバンテージなのだとこのことをつくづく感じた。

ジオパークがオリエンテーリングに直結するとは思えないが、ロゲイニングにはすでに接点がある。やはり地質学的に優れた遺産である桜島では、火山博物館が主催して、火山を主題にしたロゲイニングを今年の春に行っている。伊豆東部火山群も、その広がりにはロゲイニングで回るのに都合のよい広さだ。小回りの利くランニングや徒歩は、むしろジオパークのスケール感にあっているかもしれない。レクリエーション形式のロゲイニングの場合、ジオサイトがそのままチェックポイントに使える。自分の脚で回るジオサイトは、一層のこと記憶に残るだろう。ジオパークは、ナビゲーション・スポーツのブランディングの重要なアイテムになる気がする。



高校生たちは「赤色立体地図」という特殊な地図を使って、地形とその周囲の様子を関連づけていく。等高線が読めれば、もっと容易に世界が広がっていくのと思う。

## View 7: サービス過剰社会

震災後しばらくは、新幹線で品川駅に降り立つとその暗さに違和感があったが、今はそれが普通になった。そんなに明るくなくても良かったのだ。この夏の暑さも一段落ついて、計画停電の心配もほぼなくなった。よく吟味してみれば、ほとんど必要のないものを確保するために汲々としていたとも言えるだろう。東日本大震災は、日本社会が変わる契機…といったスローガンが叫ばれているが、不要なサービスに気づき、それを変えていく良い機会だったのかもしれない。コンビニだって自販機だって、全くないと困るが、そもそもこんなになくてもよかったものだ（もっとも被災地では、郊外のコンビニだけががんばって営業しており、貴重な物資補給場所になっている）。

オリエンテーリングウェアの代名詞トリムテックスは、夏にはたっぷり夏休みを取るし、冬場にインカレに向けた大量の注文を出しても、がんばって納期を守ってくれるなんてことはない。世界選手権の観戦のために昨年久しぶりにノルウェーに行ったが、改めてノルウェー社会全体から、「そんなにサービスしなくていいじゃないか」というメッセージを受け取った。大会会場に路線バスで行こうとしたが、あいにく週末で、始発バスが10時過ぎ！もちろん、コンビニなんかほとんどなく、終夜営業など考えられない。自販機も屋外にはないので、まめに飲料を仕入れておかなければならない。全てはサービスを受ける側からすればデメリットでしかない。しかし、メリットもある。常に先を読んで行動することが求められるのである。些細なことだが、教育的なメリットだとも言えるだろう。

また、サービスにはそもそも人手がかかるものだ。その人手が不要なのだから、その分社会全体の総労働時間は減る。そうすれば、17時半には仕事を終わることが可能で、だからこそ夏至のころなら平日の夕方に森でトレーニング！なんて生活が可能なのも、過剰なサービスによる労働がないからかもしれない。

アウトドアの世界であって、サービスはもっと本質的なデメリットを持っている。最近のトレランブームで、元々

アウトドア活動をしていなかった人が参入するようになった。イベントの場合は、他にも参加者がいるし、主催者もコース管理をしているから、ロードの延長線上でも実害はない。しかし参加者だけの試走でも、自然の中で身を守る術なく走るランナーが増えたように思う。地図が読めずにロストする人もいる。イベントは気軽に自然と親しむ機会を提供したが、そこで提供されるサービス故に、そのリスクに気づかぬまま自然の中に入る人が増えているのかもしれない。それは第三次ブームとされる登山についても、道迷い遭難の増加という形で当てはまるようだ。

サービスはあるにこしたことはないが、当然そこにはコストがかかっている。そのコストは提供者の過剰負担になる（これはコンビニの営業でもよく言われる）。さらには、サービス故に生み出される危険がある。教育の世界における「安全」などは、まさにその構造に陥っている。学校が危険を排除するので、子どもの危険に対する意識や回避能力が育たない。その時は良いが、将来的に子どもをもっと大きな危険にさらすことになるかもしれない。

アウトドアの世界で適切なサービスのあり方について、もう一度考えてみるよい時期なのだろう。それは日本社会の将来のあり方を考え直す一つの手がかりになるのではないだろうか。

(村越 真)



オリエンテーリングではおなじみのセルフサービス方式も、サービスになれたトレイルランナーには珍しく感じるらしい。ブログでも、「無駄を省いてリーズナブルな参加料」と評されたことがある。北欧生まれのオリエンテーリングとその運営スタイルは、サービス過剰社会を問い直す材料を提供してくれると言える。